

宇治市埋蔵文化財 発掘調査概報

—第48集—

春日森遺跡

広野遺跡

尊勝寺跡

赤塚遺跡

神明宮東遺跡

宇治市街遺跡



宇治市教育委員会
2000

序

宇治市内に所在する文化財や土地にはぐくまれてきた歴史性は、今日までも広く評価されてきましたが、最近では、宇治上神社・平等院の世界遺産登録により、国内外を問わず広い地域で認められるようになってまいりました。

宇治市では、このような情勢を背景に、豊かな環境に恵まれた歴史と文化のまちとして、源氏物語ミュージアムの建設をはじめとする、より質の高い文化観光基盤整備の推進に努めているところであります。

本書は、市内所在埋蔵文化財包蔵地での開発行為に伴って、宇治市教育委員会が行った発掘調査成果の概要をまとめたものです。

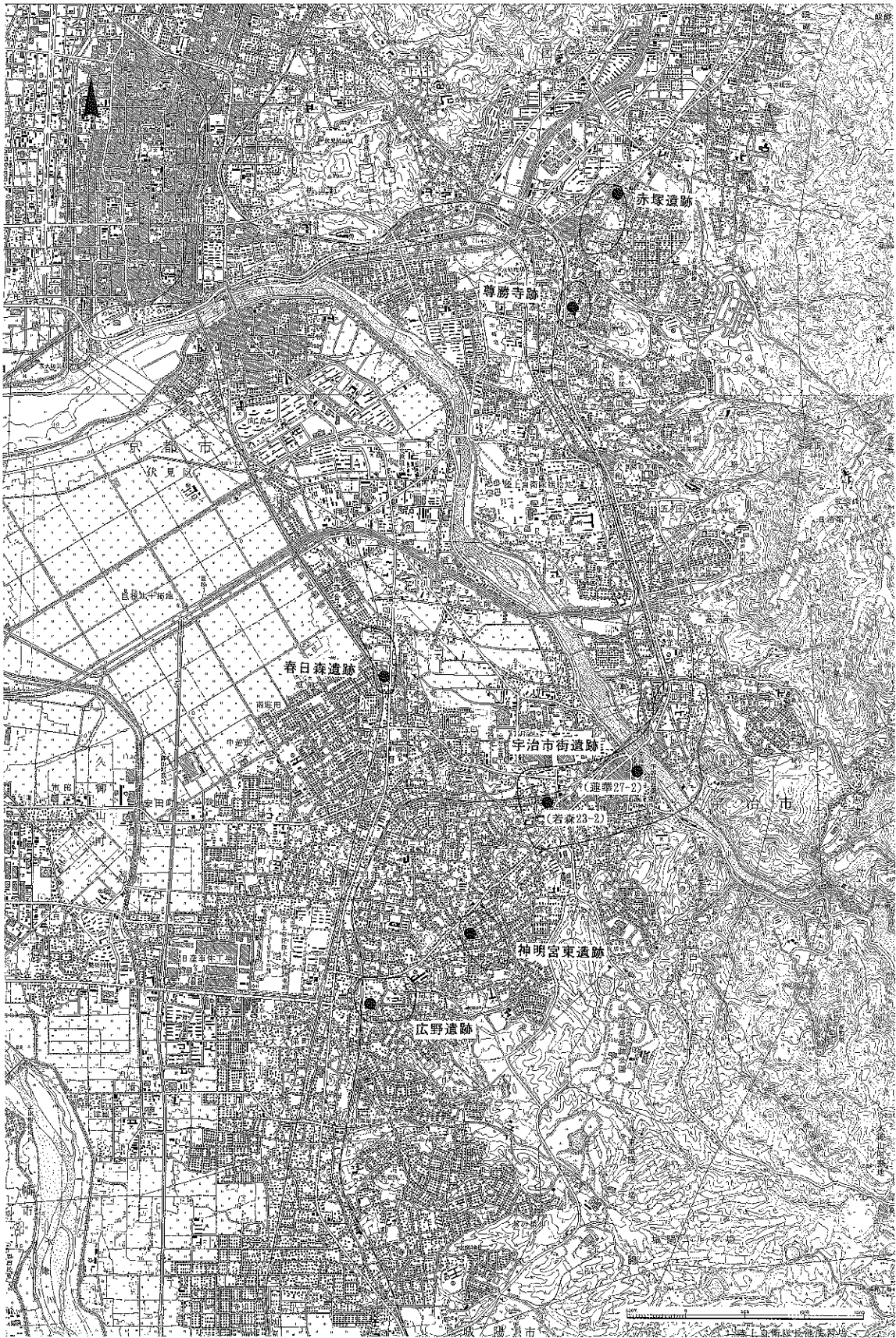
春日森遺跡では、昭和干拓時の巨椋池底よりも低い深さから中世集落を確認しました。湖畔の風景を再考させる成果です。広野遺跡の調査からは、古代のムラが洪水を被って深くうずもれていたことを、宇治市街遺跡の調査からは、平安時代の町割りが従来より広い範囲に拡大することなど、新たな知見を得ることができました。

宇治市内での宅地開発や施設建設は、現在も増加傾向にあります。今後ともこのような開発に伴う発掘調査への協力・ご理解をいただくため、宇治市でも埋蔵文化財の持つ教育効果について、ますます普及啓発を努めてゆく所存であります。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました土地所有者、工事関係の方々、ならびに調査期間中にご指導、ご助力をいただきました関係各位に対して心より御礼申し上げます。

平成12年3月31日

宇治市教育委員会
教育長 谷口道夫



本書に収録した調査地

目 次

I. 春日森遺跡発掘調査概要	
1. はじめに	1
2. 調査の概要	2
3. まとめ	8
II. 広野遺跡発掘調査概要	
1. はじめに	9
2. 調査の概要	10
3. まとめ	12
III. 尊勝寺跡発掘調査概要	
1. はじめに	13
2. 調査の概要	14
3. まとめ	16
IV. 赤塚遺跡発掘調査概要	
1. はじめに	17
2. 調査の概要	18
V. 神明宮東遺跡発掘調査概要	
1. はじめに	19
2. 調査の概要	20
3. まとめ	22
VI. 宇治市街遺跡（若森27-2）発掘調査概要	
1. はじめに	23
2. 調査の概要	24
VII. 宇治市街遺跡（蓮華107-1）立会調査概要	26

I. 春日森遺跡発掘調査概要

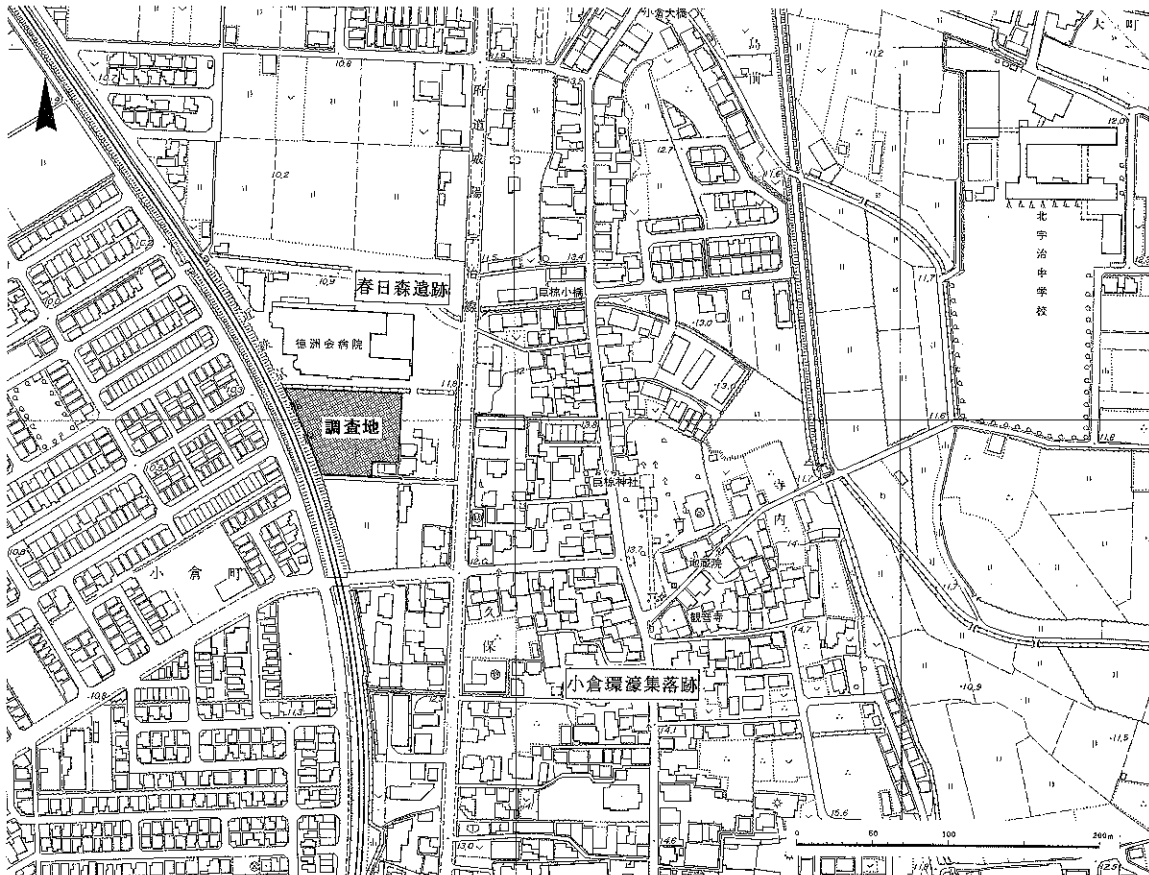
1. はじめに

本報告は、宇治市小倉町久保119-2で実施した、春日森遺跡の発掘調査概要である。

春日森遺跡は、昭和11年、田畑の耕作中に平安時代後期の五花鴛鴦唐草文鏡が出土したことで知られる遺跡であるが、実態についてはこれまで全く不明であった。

周囲には、弥生時代中後期・中世集落跡の小倉環濠集落、弥生時代後期集落跡の神楽田遺跡、弥生時代後期・中近世集落跡である巨椋神社東方遺跡が展開する。また、調査地東側には式内社・巨椋神社が存在する。このように周辺は、昭和16年に干拓された巨椋池の縁辺部にありながら、微高地で比較的安定した土地であったらしい。

今回の調査地は、現状地形はほぼ平坦地で、徳洲会病院駐車場となっている。発掘調査は、平成11年1月26・27日に試掘調査を行った後、同年3月8日から開始した。現代表土を重機にて除去し、人力掘削にて遺構の検出・土砂の排除を行った。完掘後は、写真撮影、平面・断面測量にて記録作成を行い4月1日に終了した。調査面積は200㎡である。



第1図 調査地の位置

2. 調査の概要

調査地周辺は、明治42年測量の地形図にはすでに集落域として記載されており、旧大和街道沿いの集落として近世末には開発されていたことが知られる。集落の中心は調査地東約100mの巨椋神社付近で、南北700mほどの小規模な微高地上に展開していたらしい。ただし巨椋池沿辺の旧地形は、文禄三年(1574)、豊臣秀吉によって行われた太閤堤の築堤によって一変しているらしく、近世以前の様子を知る手掛かりは少ない。

近年、現国道24号線を挟んだ調査地東側で、3度の発掘調査¹⁾が行われている。いずれも小規模調査ながら土壙や溝・柱穴などの中近世遺構を検出している。また、弥生時代中後期・古墳時代初頭の遺物が得られている。

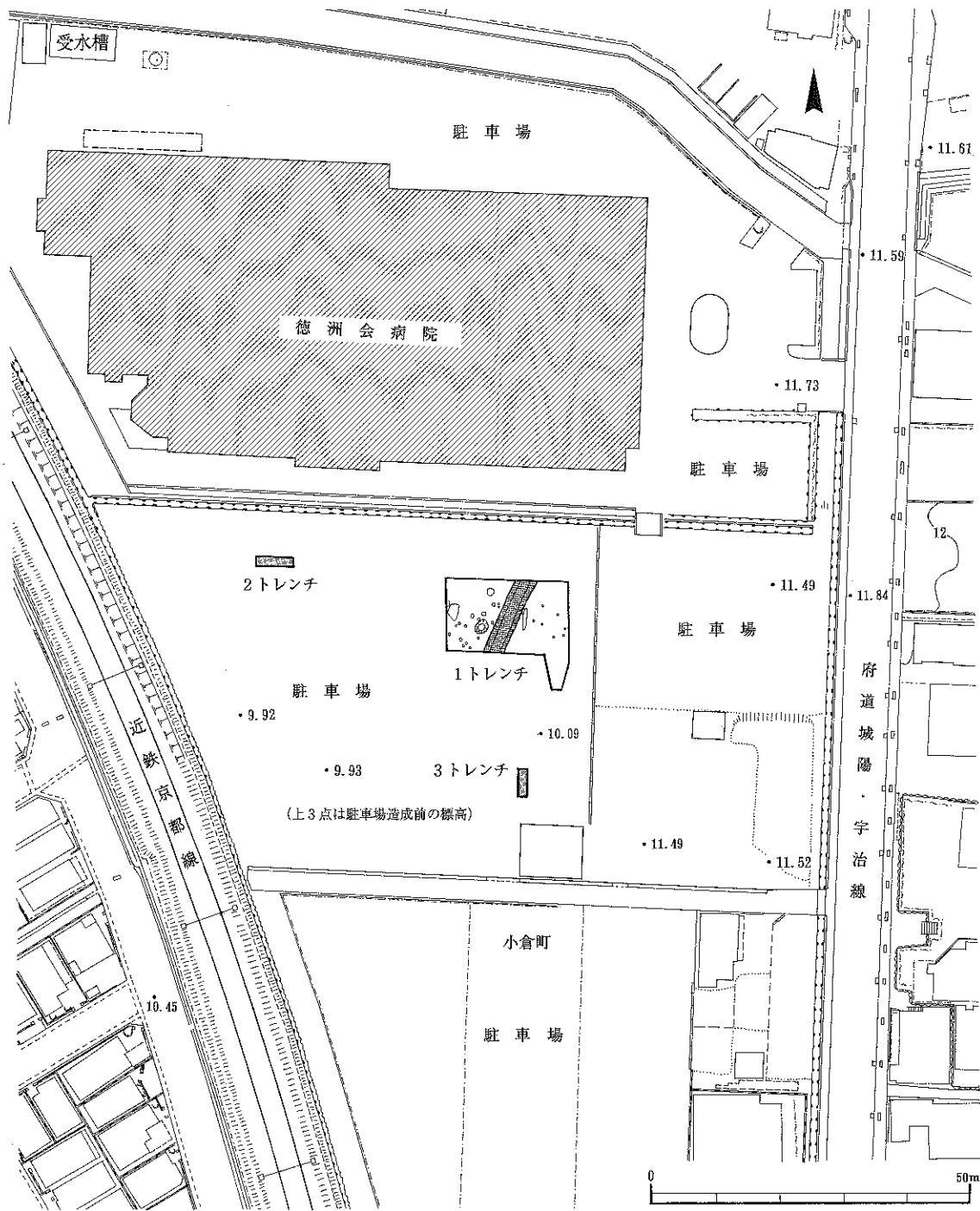
今回の調査地は集落西端にあたり、巨椋池との境界付近に想定された。また、平安後期鏡出土に関わる遺構の検出が期待された。結果として、同鏡の作成時期に近い12世紀には集落の展開がみられたことを確認した。以下に、調査の詳細を報告する。

A. 試掘調査

平成11年1月26・27日両日、本調査に先だって試掘調査を実施した。調査地点は、第3図中の1トレンチ北西角の一部と2トレンチ、3トレンチの3か所である。結果は、すべてのトレンチから12～14世紀の土師皿・瓦器などの出土がみられ集落域の広がりを確認した。



第2図 調査地全景（東から）



第3図 トレンチ配置図

1トレンチでは、土層中には堤防状の隆起を確認し、地表下約2mで礫質の比較的安定した地盤を検出した。2トレンチでは、表下3mまで掘削したものの、有機質を含むシルト層が続き、低湿環境にあったことがわかった。そのため、1・2トレンチ間に集落域の境があるものと判断できた。3トレンチでは、1トレンチとほぼ同層序であることを確認したほか、比較的遺物が集中して出土する傾向がみられた。

B. 発掘調査

試掘調査の成果を受け、堤防状遺構の存在が認められる1トレンチを調査の中心とした。調査は、平成11年3月8日から開始し、10×20mの調査区を設定した。結果として試掘時の所見どおり地表下約2mで遺構面を検出し、12世紀を中心とした時期の集落跡を確認した。

a. 検出遺構

(層 序) 中世遺構面までの基本的な層序は3層で、現代盛土、近現代水田、中世遺物包含層、遺構面である。包含層は、12世紀から13世紀の細片化した遺物と有機質ブロックを含んでいることから、調査地では、集落が廃絶した後は、雑地化したかもしくは巨椋池水位の上昇によって水没し、再び水田化された変遷を知ることができた。

上層より、1は駐車場造成時の盛土で、2～4は田圃の床土層である。田圃の床土層は近世～現代のものとみられる。いずれも遺物を含まないが、最上層は昭和年間まで利用されていたものである。この下に遷移層である(5)が存在し、遺物包含層(6)、遺構面となる。遺構面は、こぶし大の礫を大量に含む砂質土(14)上に展開している。標高約9m。ここには基本的に遺物は含まない。また、11～13の土手状の遺構については内部に遺物を含む盛土であることが確認できた。幅1.9mで、範囲は、南端がS X02手前から北に向かって延長するものとみられる。性格は明らかでない。14以下は巨椋池の堆積作用による砂層の互層で、1m



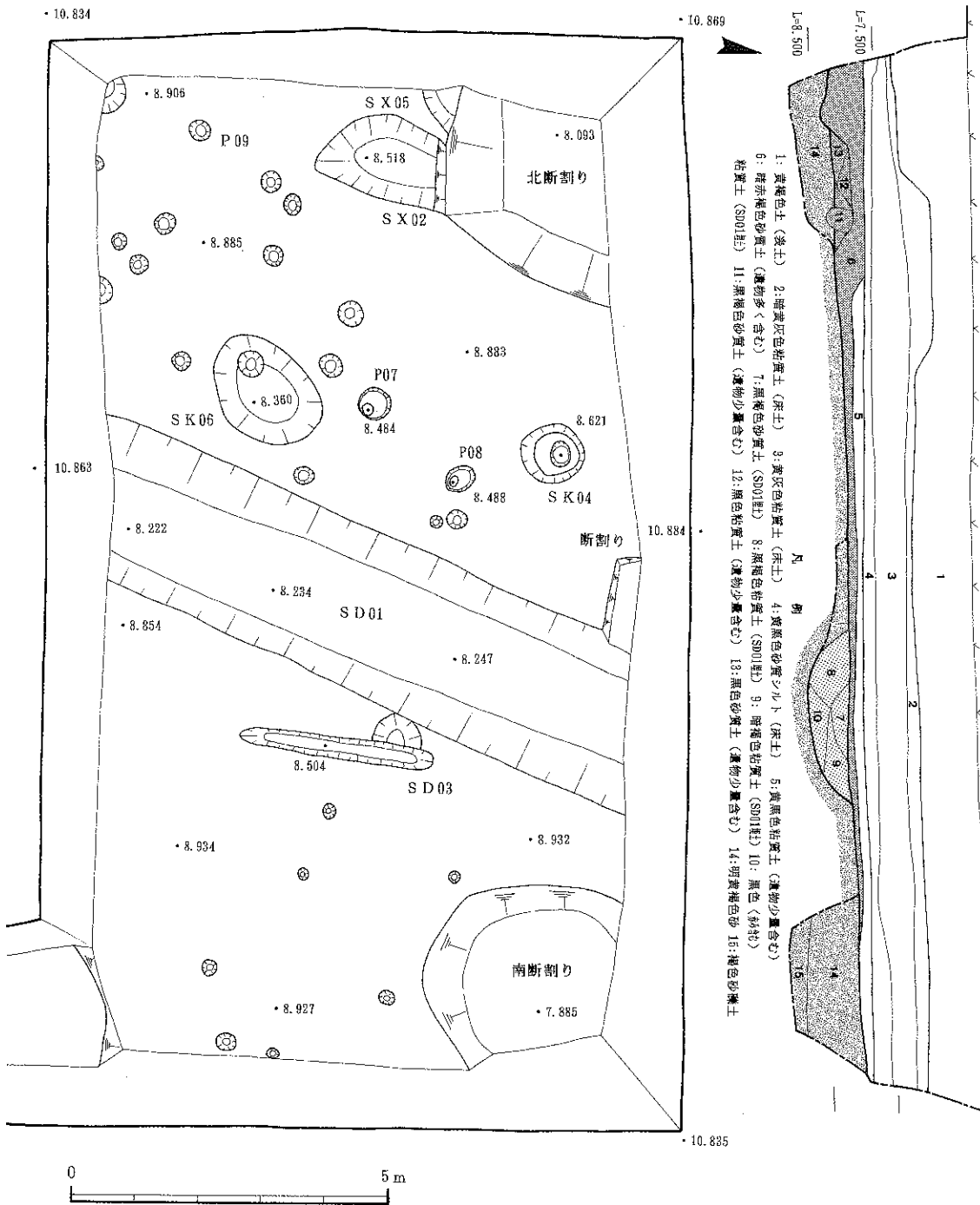
第4図 調査風景 (北東から)

以上の厚が堆積している。さらなる掘削はできなかったものの、砂層中に遺物や有機質を含まないことから、下層遺構面の存在を想定することは難しく、周囲でみられる弥生・古墳時代遺構の展開は当地では認められない可能性が高いと判断できた。

(遺 構) 溝、土壇、柱穴など、12世紀前半を中心とする遺構を検出した。

S D01 南北方向の溝である。幅2.5m、深さ0.8m。砂(7・8・9・10)で埋まっているため、機能時には一定の流量があり、南流していたとみられる。ただし遺物は全く含まれず、中世集落展開以前に埋没したものと考えられる。

S X02 こぶし大の礫が詰まった不正円形の土壇である。深さ20cmほどの皿状を呈し、礫間埋土は、有機質を含む泥土であった。破



第5図 トレンチ平面図・土層図

片化した遺物を多く含む。遺物は12世紀を示す。性格は不明である。

SD03 浅い溝状の遺構である。遺物片を含む。

SK04 直径1.8m、深さ20cmの土壇である。

SX05 不定形の土壇である。礫を疎らに含むことや泥土を埋土とすること、遺物の包含状況はSX02と同様である。遺物も概ね12世紀のものである。

S K 06 直径約1m、深さ50cmの、すり鉢状土壙である。破片化した遺物を少量含む。

P 07 直径40cm、深さ40cmの柱穴で、内部に柱材が遺存していた。柱材は据え付け当時よりかなりやせているらしく直径8cmほど、高さも5cmを残すのみであった。

P 08 直径 柱穴で、内部に柱材が遺存していた。P 07より遺存状況はよいものの、据え付け当時のままの状態ではない。柱材は直径10cm、高さ15cmが残っていた。P 07と組み合わせるとみられるが、板壁程度の軽量の構造物であったと考えられる。

b. 出土遺物

遺物は、試掘時のものも含め整理箱に約6箱出土している。ほとんどが細片化したものであり遺物包含層からの出土物が多いが、概して摩滅は少ない。種類には土師器（皿、少量の鍋・釜の体部片）、須恵器（鉢・甕体部片）、瓦器（椀・皿）、陶磁器（椀）があり、概ね12世紀を中心とした時期の中世土器である。可能なものは凶化につとめた。口径については机上復元したものを含む。以下、遺構ごとに概要を述べることとする。

S X 05 1・3・4は土師皿である。1は裏面には粘土接合痕を残す。3の口縁部は直線的に伸び、器壁は6mmとやや厚い。端部の面取りは明瞭でなく、丸みを帯びて収まる。口径12cm。内面には煤の付着がみられる。4は口縁端部下に7mm幅の粘土接合痕を明瞭に残す。口径12cm。2は瓦器皿である。口縁端部は外反し、底部には張り付け高台を持つ。外面には底部付近にまで見込みには斜格子状の暗文を持つ。いずれも12世紀後葉～13世紀初頭のものである。

S X 02 5・6が瓦器皿、7・8が土師皿である。5・6とも高台を持たないタイプで、見込みには粗い暗文を持つ。5の口縁端部は強い横ナデのため外反する。口径は、9.6cm、8.8cm。7は、いわゆるコースター型である。8は、内弯気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く収まる。概ね、12世紀中葉から13世紀のものである。

北断割り トレンチ北西角の土手状遺構、包含層内出土遺物である。9・10が土師皿、11が瓦器椀である。9は器壁が6mmと厚く口縁の屈曲も緩いが、ての字状の形態をとどめる。口径9.2cm。11は、大和型で外面暗文の簡素化がみられる。いずれも12世紀前・中葉のものである。

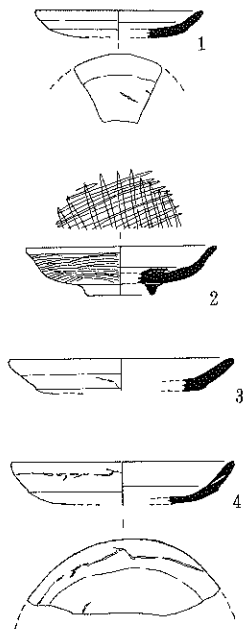
S K 06 土師皿数点が出土している。12は、口縁部と体部境に強いナデがみられる。

P 09 13は瓦器椀の底部であるが、焼成不良で淡褐色を呈している。摩滅著しい。

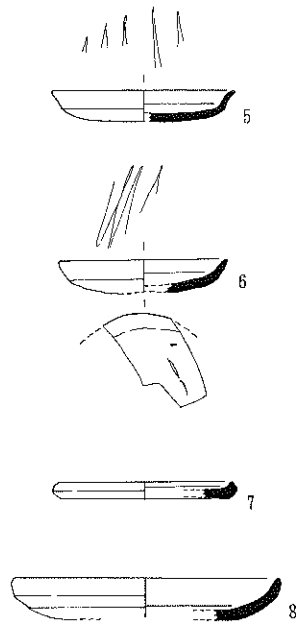
1 トレンチ包含層 14～17が土師皿、18・19が瓦器椀、20・21が白磁椀、22が須恵器片口鉢である。14は外端面にナデが見られる小型品である。16には面取り、17には2段ナデが見られる。18・19はいずれも大和型で、外面の暗文は省略されている。22は赤褐色で胎土に砂粒を多く含む。14を除き、概ね12世紀前葉から13世紀前葉のものである。

3 トレンチ包含層 23・24が土師皿、25～27が瓦器椀である。23はコースター型、24は2段ナデが見られる。26・27は大和型、25は楠葉型か。12世紀中葉から末葉のものである。

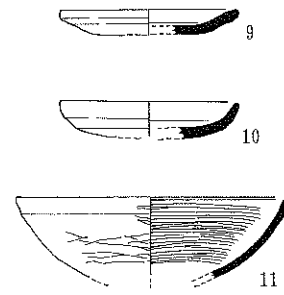
S X 05



S X 02



北断割り



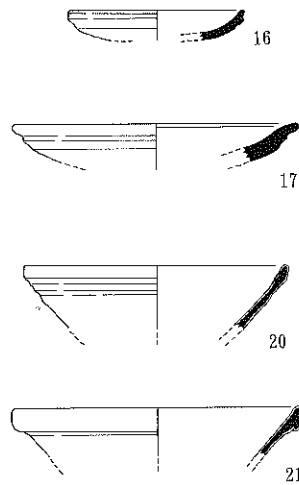
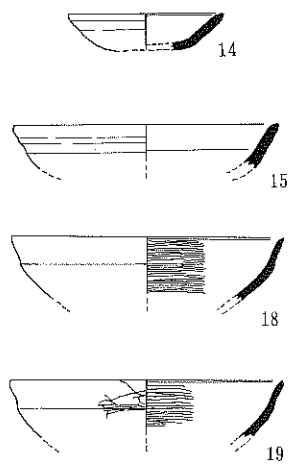
S K 06



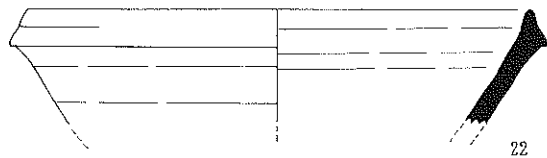
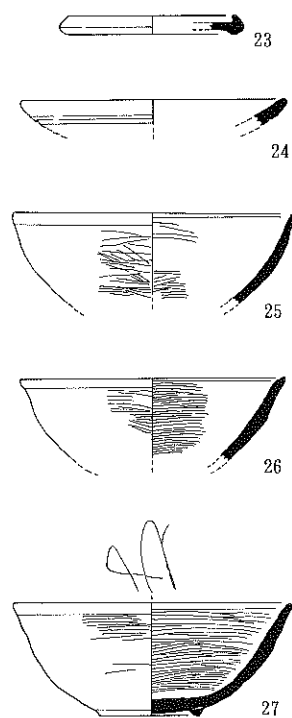
P 09



1 トレンチ包含層



3 トレンチ包含層



第6図 出土土器実測図

3. まとめ

以上のとおり、成果の概略を述べてきた。ここでは、周辺環境をめぐる若干の知見をまとめ、結びとしたい。

かつて調査地西側に大きな湖面をたたえた巨椋池は、時代によって保水量に変化があり、それに伴って平面的広がりも異なっていたことが推定されてきた。ただし、池を巡る環境が、文禄年間の伏見城築城に伴う宇治川の迂回工事により、池水循環の悪化を招きつつ多大に変容したことは先に述べた通りである。この工事は、歴史的景観にも大きな影響を及ぼしたとみられる。

今回の調査で検出した12世紀の集落の広がりからは、12世紀から13世紀にかけて湖水面が下降していたことと、縁辺部で陸地化が進行していた様子を知ることができる。遺構検出面の標高は9mを前後する高さで、これは昭和16年に巨椋池が干拓された時点の池底より約1m低いため、当時の湖面はさらにこの標高を下回ることが明らかである。調査地東側800mの地点では、13世紀を中心時期とした集落跡を標高11m前後で確認しており、中世を通じて概ねこの水位が継続していたことがわかる。平安末から中世にかけての調査地周辺は、田畑が比較的広がる農村風景にあったとみられる。今回遺構は検出できなかったものの、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけても、ほぼ同様相にあったのであろう。また、遺構空白期にあたる古墳時代後期から奈良時代にかけては、宇治市域では、遺跡が段丘面や台地上に展開する傾向がみられる。今後の調査の蓄積を見る必要があるが、古墳時代後期ごろに巨椋池水位の上昇を想定することも可能ではないかと考えている。

また、中世の様相が一変するのが近世であることが、今回の調査で確かなこととなった。平成元年調査地点では中世遺構面に約2mの盛土が行われて近世集落が形成され、本調査地は水田化している。このことから、巨椋池中を南進する大和街道の新設を機に、街道集落として新たな展開がおこったのではないかとみられる。

近年、巨椋池周辺では久御山町域を中心に調査が進行しており、今まで調査の及ばなかった低地部での遺跡発見例が増加している。同町市田齊当坊遺跡では、南山城最大規模の弥生時代集落が標高約9mの地点で展開することが確認されており、周辺景観の再考を促している。本調査成果とあわせ、宇治市域でもさらに低地での遺跡展開が認められるのではないかと想定される。今後、一層周辺の様相が明らかになることを期待したい。

注1 服部和一・杉本宏「神楽田遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第1集 1982

吉水利明・杉本宏「巨椋神社東方遺跡発掘調査概報」 同上

猿向敏一「小倉環濠集落跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第14集 1989

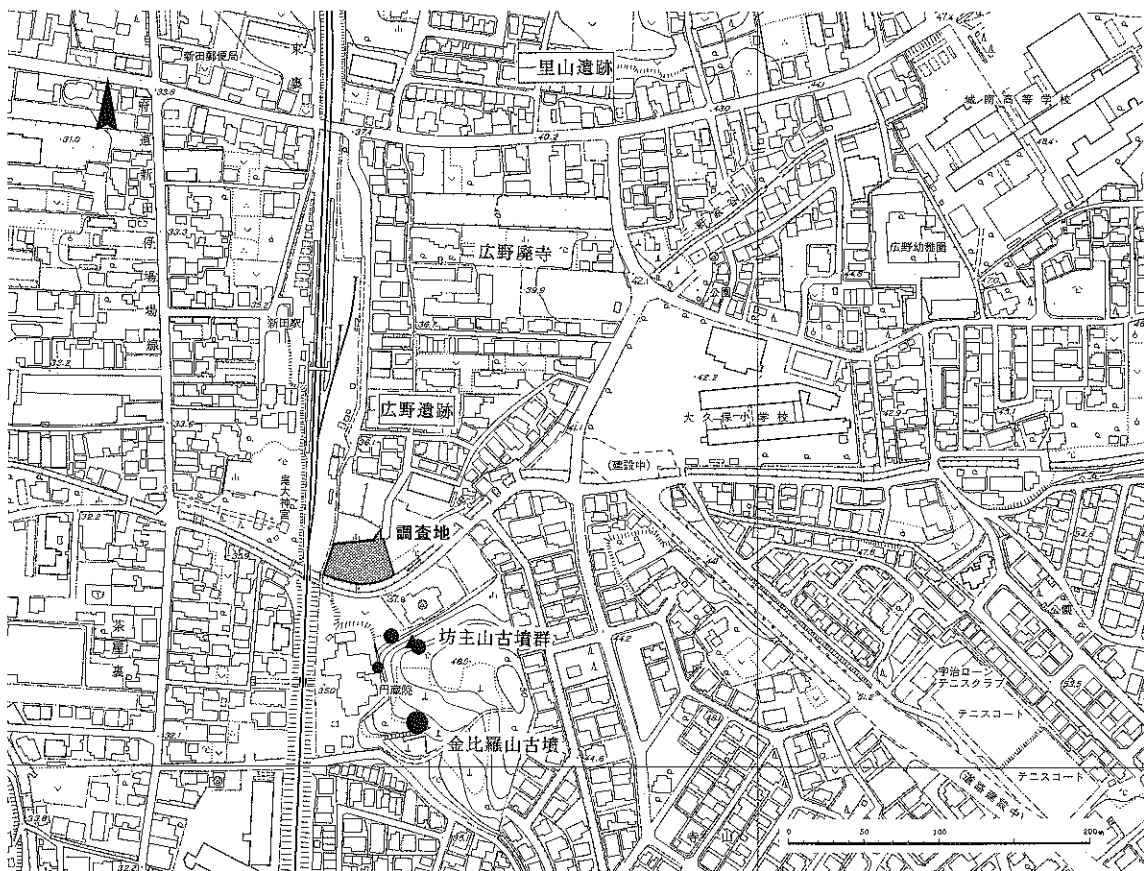
注2 岩松保・森島康雄・竹原一彦・柴曉彦・野々口陽子「国道1号京都南道路関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第90集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999

Ⅱ．広野遺跡発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、宇治市広野町東裏107-1,107-5で計画された都市計画道路新宇治淀線の建設に伴う広野遺跡発掘調査概要である。

広野遺跡は、広野町東裏一帯に広がる古墳時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡である。遺跡内には金比羅山古墳、坊主山古墳群や、白鳳寺院・広野廃寺の存在が知られることから、宇治川西岸域にあって比較的大規模な集落が営まれていたことが想定されている。広野遺跡の調査は今回で5回¹⁾目であるが、いずれも小規模で集落の具体像を知るには至っていない。調査は、平成11年12月8日竹林・雑木の伐採から開始し、平成12年1月27日より重機掘削を行った。重機では遺構面までの土砂を排除し、後、人力にて遺構掘削を行った。完掘後は光波測量機による平面図を委託作成し、写真撮影・土層実測により調査結果を記録し、トレンチの埋め戻しを行って同年3月27日に調査を終了した。調査面積は200㎡である。なお期間中、調査成果の公開に際して広野公民館にご協力をいただいた。感謝したい。



第1図 調査地の位置

2. 調査の概要

調査地周辺は、市域東部の山丘から西に向かって派生する低丘陵の末端部に位置する。調査地西側には、現JR奈良線付近を境に台地が広がり、南側には、同町八軒屋谷付近に端を発する小河川・名木川によって開削された谷地形が存在する。

今回の調査では、古墳時代から鎌倉時代にかけての集落を検出した。また、土層中には名木川が押し流した平均1.5mに及ぶ土砂堆積が確認できた。以下に調査の概要を述べる。

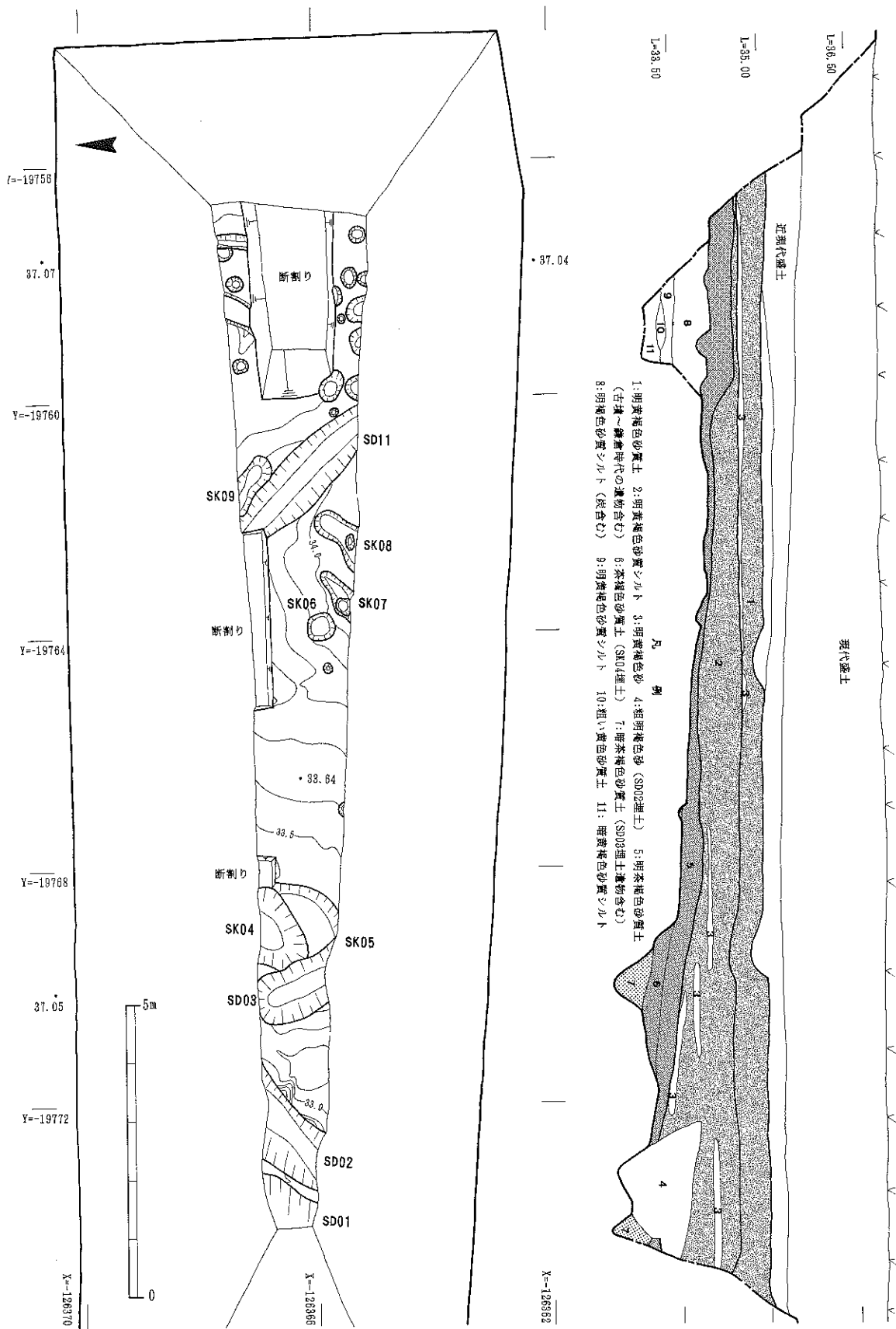
a. 検出遺構

(層 序) 調査地内の基本的な層序は4層に区分できる。上層より近現代置き土、中世後半から近世の土砂堆積層(1~4)、遺物包含層(5)、遺構面を形成する古墳時代以前の堆積層(8~11)である。今回、いわゆる地山までは確認することはできなかった。

中近世土砂堆積層は大きくは2層で、河川氾濫により直接的に堆積したもの(3・4)と、一定氾濫が安定した後の堆積作用によるもの(1)がある。両者とも基本を黄褐色砂質シルトとするが堆積状況に差異がある。前者は、遷移的に粒形の組成変化がみられ、堆積方向は一定で乱れがなく、間層に複数の粗い砂を持つ。後者は、粒形組成に粗密がみられ、堆積の方向性が不明瞭である。両者共に遺物を含まないため形成時期の特定はできない。遺構面は明褐色砂質シルト上に展開する。ここには炭を含むほか、下層には近似した質で複数土層がみ



第2図 トレンチ全景（北西から）



第3図 トレンチ平面図・土層図

れることから、過去の河川堆積作用によって形成されたものと考えられる。

(遺 構) 古墳時代・鎌倉時代の土壇・溝・柱穴を確認している。なお、包含層中には奈良時代遺物も含むため、同時代の遺構が含まれる可能性がある。

S D 01 トレンチ西端で検出した溝で、最底部は調査地外となった。埋土からは、同心円文を持つ須恵器甕片が出土している。古墳時代後期もしくは奈良時代。

S D 02 中近世の河川氾濫時に旧地盤を削って堆積したとみられる。ここでは溝としたが、全体形状は不明。埋土は土層3と同様の粗い砂で、遺物は含まない。

S D 03 幅0.7m、深さ0.5mの溝である。古墳～奈良時代遺物を含む。

S K 04 S D 03埋没後に掘削された土壇。深さ0.5mで遺物小片を含む。奈良時代か。

S K 05 S D 03埋没後、S K 04掘削前の土壇である。S D 03の上層に当たる可能性があるが、遺構輪郭の方向が異なるため別遺構とした。深さ0.3mで遺物小片を含む。

S K 07,08 不定形の皿状土壇に柱穴を持つ。両者が組み合っ柱筋となる可能性がある。

S D 11 幅0.6m、深さ0.2mの溝である。鎌倉時代遺物を含む。

東側柱穴群 調査範囲の制約上明瞭に柱筋を確認できなかったが、複数棟の建物となる可能性がある。破片化した土器片を含むものがあるが時期は不明。

b. 出土遺物

整理箱約4箱の遺物が出土しているがいずれも小片である。主に包含層に含まれていたもので古墳時代(須恵器杯・甕)、奈良時代(土師器甕、須恵器杯・壺・甕)、鎌倉時代(土師器皿、瓦器三足釜)の各土器類と、奈良時代のものとみられる平瓦が1片ある。

3. まとめ

今回の調査で検出した集落遺構からは、広野遺跡の範囲が南側に向けてさらに延長することを確認した。西側に向けては傾斜面となるが、溝を掘削して排水機能を高めているものとみられた。おそらく集落中心域は調査地北東一帯に展開するものとみられる。それと同時に、微地形については、後世の土砂堆積によってかなり変化していることが明らかになった。

調査地内でみられた中近世堆積層は、下層が短期間の氾濫作用によるもので、上層はやや時間をかけて堆積したものとみられる²⁾。堆積の時期については推測の域を出ないが、中世後期から近世初頭の間とみられる。このような堆積層は、隣接する城陽市域北部一帯でも確認できるという³⁾。このような広域での土砂流出は、上流域で比較的規模の大きい開発行為を想定することが可能ではないかと考えている。詳細の解明に向け、今後の調査に期待したい。

注1. 杉本宏・荒川史「広野廃寺発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第17集 1991

注2. 堆積層が2分できる見解については、小野映介氏(立命館大学大学院)にご教示いただいた。

注3. 小泉裕司氏(城陽市教育委員会)にご教示。

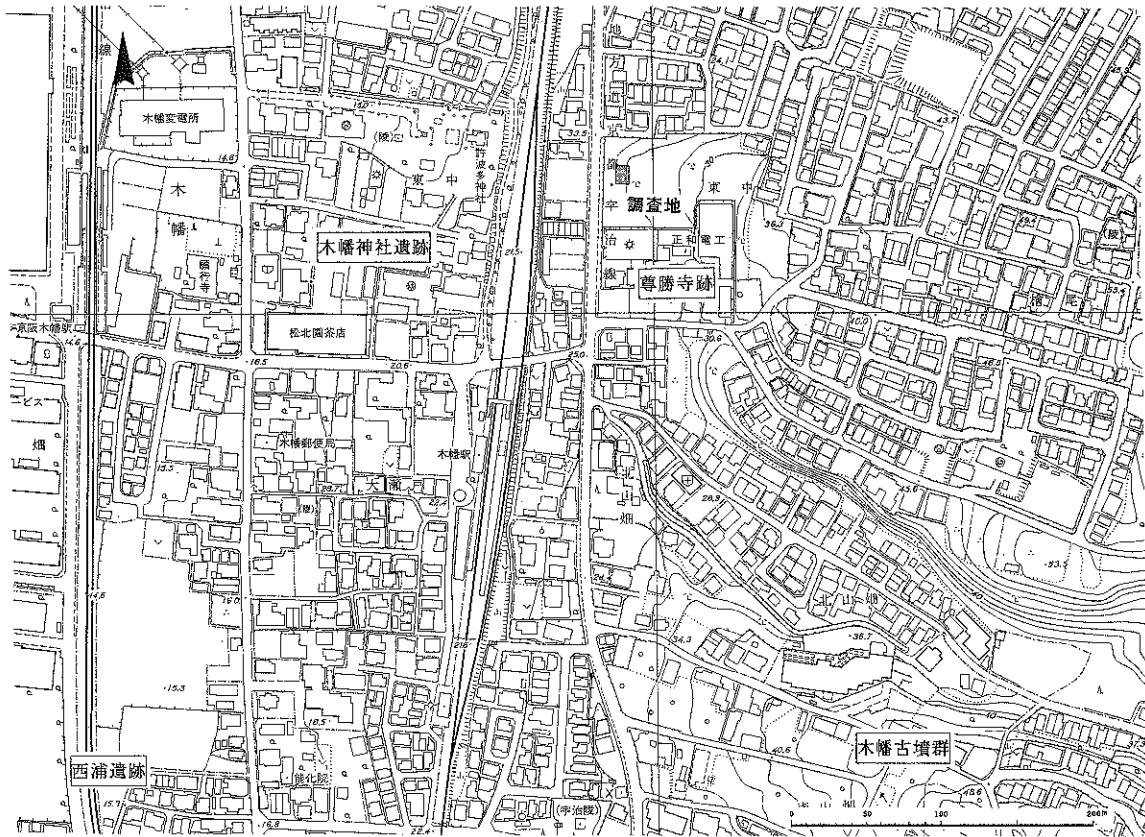
Ⅲ. 尊勝寺跡発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、宇治市木幡東中25番地の1他において実施した、宅地造成に伴う尊勝寺跡の発掘調査の概要である。

尊勝寺跡は、1238年、慈心によって開創されたと伝わる寺院跡であるが、創建後の経過や寺地など詳細はほとんど不明である。調査地の周囲は、藤原氏一門の木幡墓が存在するほか、西接する西浦遺跡¹⁾では中世集落が展開する遺跡環境にある。また、木幡墓と重複して²⁾120基以上を数える古墳時代後期群集墳・木幡古墳群が位置するほか、木幡神社遺跡では奈良時代を中心とした遺構・遺物が確認されている。このように一帯は市内でも遺跡集中度の高い地域にあり、今回の調査成果が期待された。

調査は、平成11年9月14日に着手し、重機での表土掘削と人力による遺構掘削を行った。その後、写真撮影と平板による平面測量によって記録を作成し、埋め戻しを行って同年9月21日には調査を終了した。調査面積は計72㎡である。



第1図 調査地の位置

2. 調査の概要

a. 検出遺構

調査地は、市域東に発達する低位段丘上に位置する。現地は、調査前は茶畑であり、雛段状に平坦化されていたため、遺構面が削平されている可能性が考えられた。

調査は、地表下約30cmで現れた赤褐色土（地山）上面で実施した。検出遺構は比較的深度が浅く、予想どおり上面削平を受けている様子が窺われた。

調査の結果、柱穴を含む円形状の土壌を60か所以上確認した。規模・形状とも様々で、重複関係にあるものもあり、掘方内に小さな礎石状のものを配しているものもみられた。明らかに掘立柱建物の存在が伺えたが、柱筋の並びを確認することはできなかった。出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代の間にと考えられる。

b. 出土遺物

今回得られた遺物はコンテナ約3箱分であるが、これらはほとんどが土師器・須恵器・瓦器等の細片であった。特に土師器は表面の摩滅が著しく、調整がはっきりしない。

トレンチ出土遺物 1～5は土師器である。これらの口径と器高は順に、1が9.0cm・1.5cm、2が8.6cm・1.2cm、3が9.4cm・1.7cm、4・5が共に10.0cm・1.5cmを測る。調整の不明な1・2以外はみな口縁部をヨコナデし、端部がやや直立ぎみになっている。1・

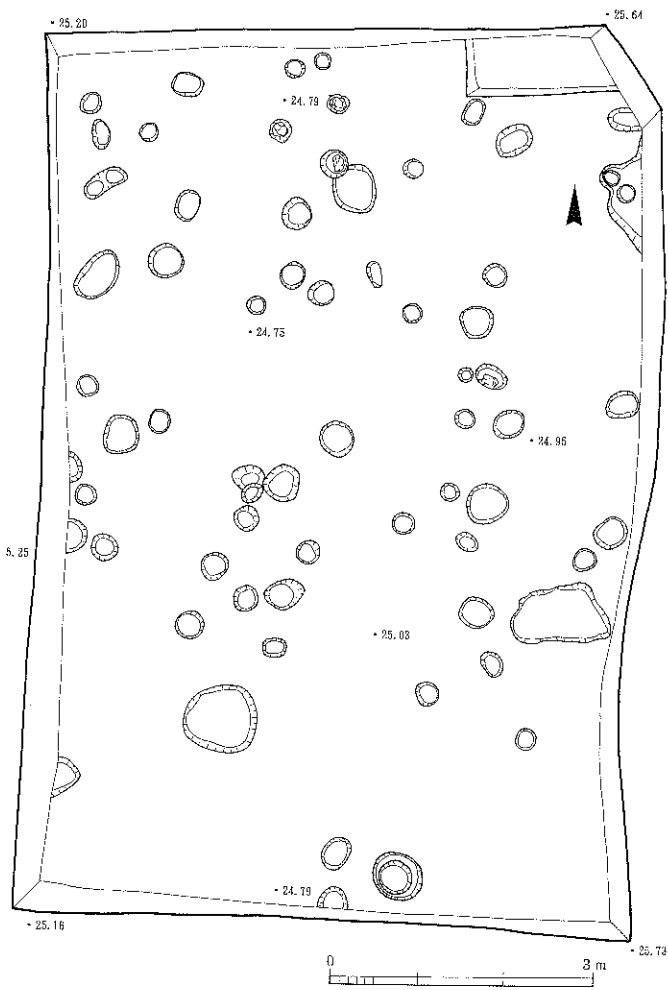


第2図 トレンチ全景（南西から）

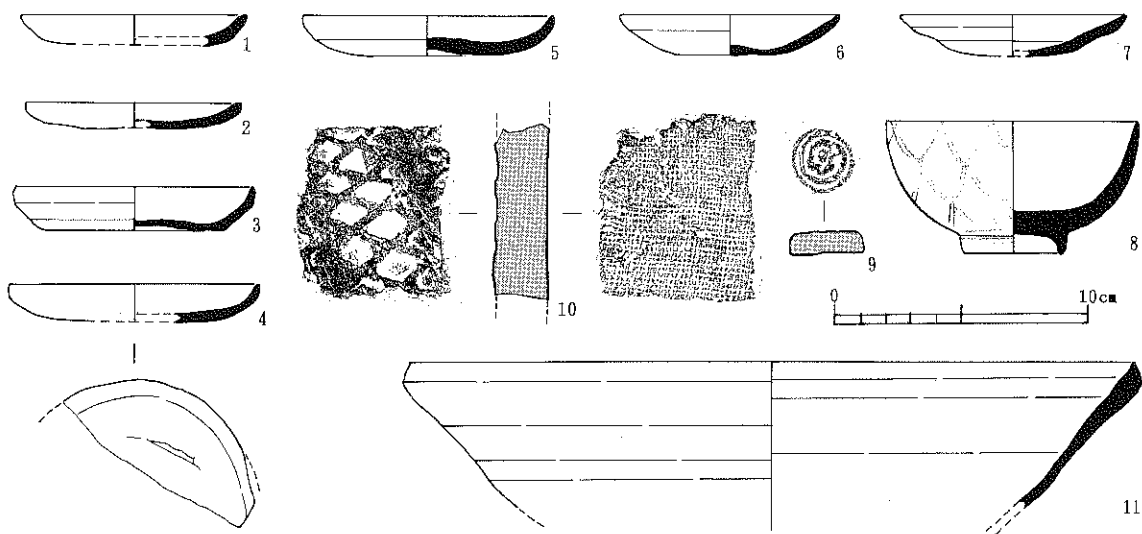
2・5は淡褐色。3は淡茶褐色。4は淡灰褐色で、底部に粘土のつなぎ痕が見える。これらは概ね12世紀中葉から終り頃のものである。須恵器では、東播系の鉢（11）等がある。口径28.6cm、胎土は青灰色で砂粒を含む。端部はやや肥厚するが、外に突出はしない。11世紀末から12世紀前半頃に比定できる。陶磁器片では、器種不明の一点があり、片面は黒釉掻き落とし、もう一面は染付で植物文様を描く。

精査中出土遺物 滑石製石鍋と、土師皿（6）が出土した。皿は口径8.8cm、器高・1.6cm、器壁は薄く、赤褐色。16世紀終り頃のものか。

表採資料 調査区内では他にも様々な遺物が表採された。まず、内面に同心円文状のタタキ目をもつ須恵器片が数点ある。主に調査区東方の斜面地一帯に比較的まとまってみられた。10は



第3図 トレンチ平面図



第4図 出土遺物実測図
(1～6：トレンチ内，7～11：表採)

奈良時代の平瓦片である。凹面に格子目のタタキ、凸面に布目圧痕がみられる。中世では、常滑壺片・東播系須恵器のこね鉢片や壺片・信楽焼と備前焼のすり鉢片・瓦質風炉片等がある。近世では、伊万里焼椀（8）がある。二重網目文の染付で、18世紀頃のくらわんか椀である。土製品では、伏見人形の御輿片や土鈴片、泥面子（9）がある。その他では、灯明皿（7）や寛永通寶等が表採された。

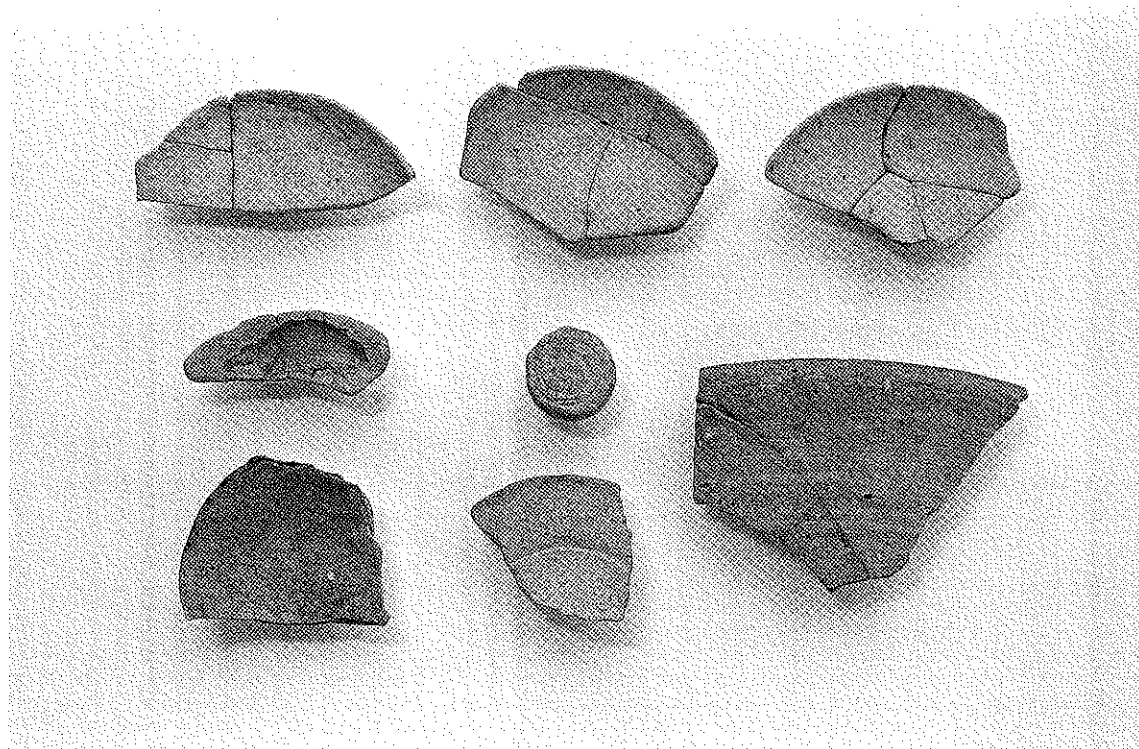
3. まとめ

今回の発掘調査では、掘立柱建物とみられる平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構群を確認した。調査面積の制約から、寺院との関連を含めて詳細を明らかににはできなかったが、集落域の展開を当地で確認できた成果は大きい。おそらく、集落の中心域は調査地の北方にあり、今回見つかった建物群は、遺跡の南限辺りに位置するものと思われる。周辺の調査に今後期待しておきたい。

注1. 荒川史・西村忠祥「西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第21集 1993

浜中邦弘他「西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第35集 1996

注2. 吹川直子「木幡古墳群発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第39集 1997



第5図 出土遺物写真

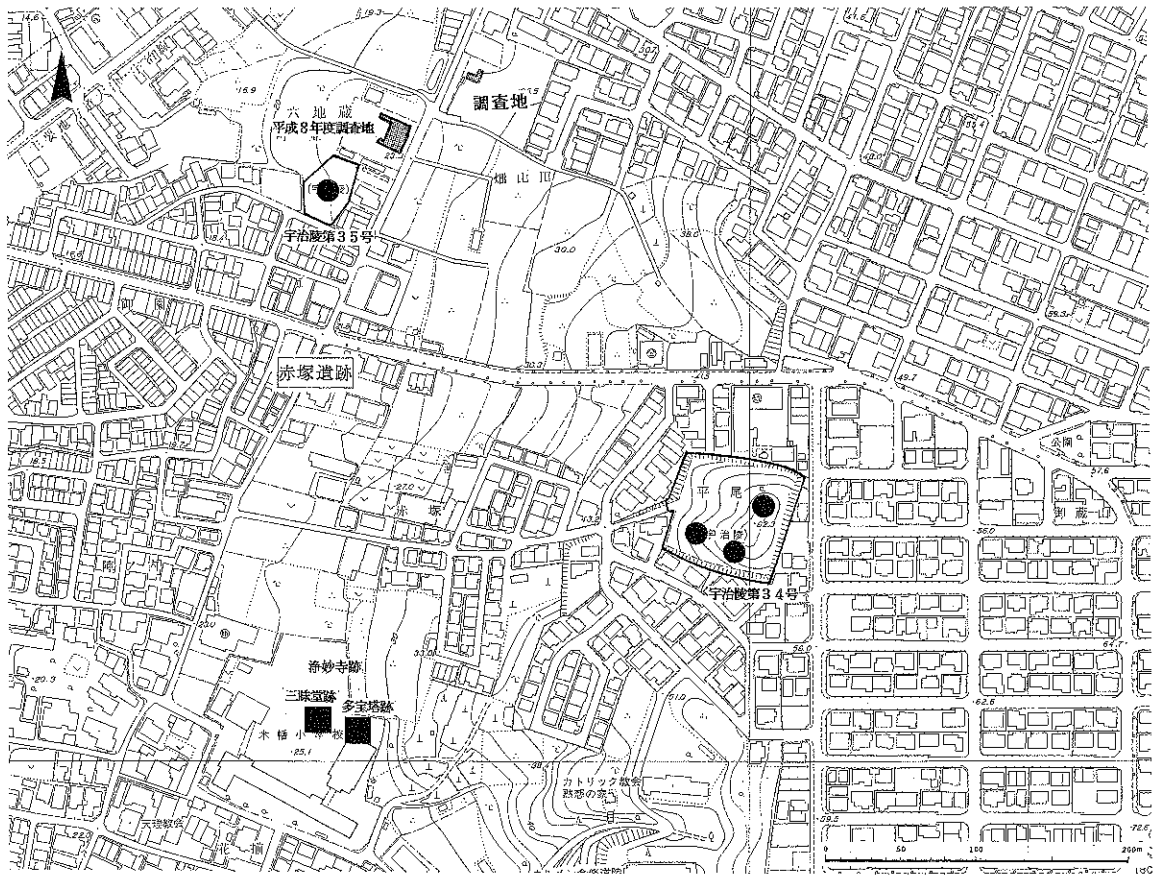
Ⅳ. 赤塚遺跡発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、宇治市木幡畑山田20-3他で計画された宅地造成に先だって行った赤塚遺跡の発掘調査概要である。

赤塚遺跡は、宇治市・京都市市境付近に位置する遺跡で、標高25m付近の段丘上に立地している。遺跡周囲には、藤原道長建立の木幡浄妙寺跡が存在するほか、後期古墳群（現宇治陵¹⁾）の展開がみられる。赤塚遺跡では平成8年度に300㎡の調査を実施しており、平安後期から鎌倉時代にかけての集落跡を検出している。

今回の調査地は、平成8年度調査地の北東約60mの地点に当たり、調査前は駐車場として利用されていた。調査は平成11年7月21日から開始した。作業は、重機掘削にて表土を除去し、人力で精査・遺構検出を行った。完掘後は、基準点測量を委託にて実施し、平板測量・写真撮影によって記録を作成した。全作業が完了した後は、トレンチを埋め戻して整地し同年7月30日に終了した。調査面積は100㎡である。



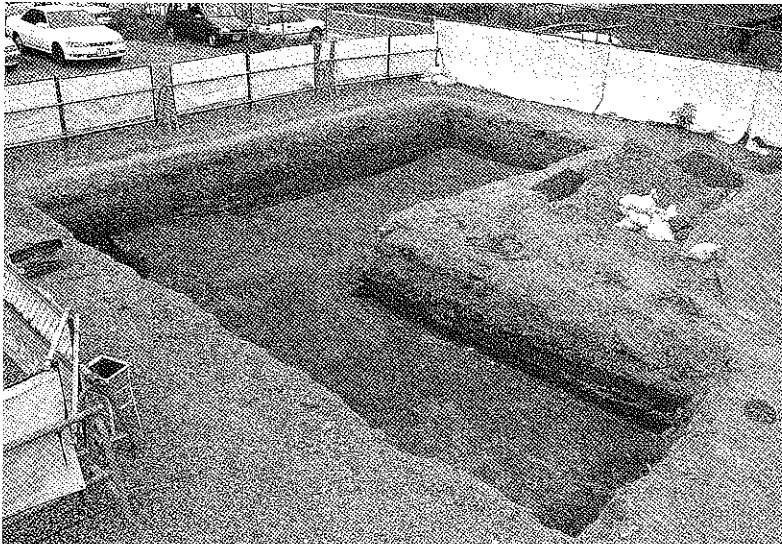
第1図 調査地の位置

2. 調査の概要

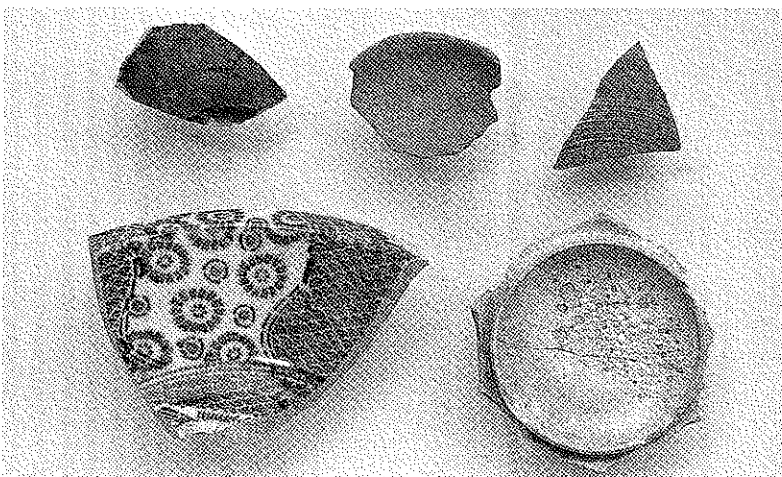
調査地は、北西方向に傾斜する斜面地形にあるが、現状は平坦で、山側である東部分では切り土造成を受けている可能性が考えられた。そのため、調査地西部にトレンチを設定した。調査地内の層序は、駐車場・竹林時の置き土約1m、遺物を含む茶褐色土、有機質を含む暗灰色粘質土であった。暗灰色粘質土の堆積状況からは、かつて当地が低湿状態にあったことが想定できたため、この上層で比較的安定的な地盤である茶褐色土上で遺構検出を行った。結果として遺構の存在は確認できず、当地はちょうど谷地形中に位置することがわかった。現在でも、調査地西側では周囲に比べて茶畑が一段低くなっており、小河川が西流している状況にある。このことから赤塚遺跡は、当地を境に南方向で展開していたことが想定できる。

出土遺物は、茶褐色土中の土師器片と、表土中の土師器（皿）、須恵器（鉢）、瓦器（椀）、青磁（椀）、陶器など整理箱1箱がある。概ね中世遺物で、陶器は近世遺物である。

注1. 吹田直子・小川裕紀「赤塚遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第39集 1997



第2図 調査地全景（南から）



第3図 出土遺物写真

V. 神明宮東遺跡発掘調査概要

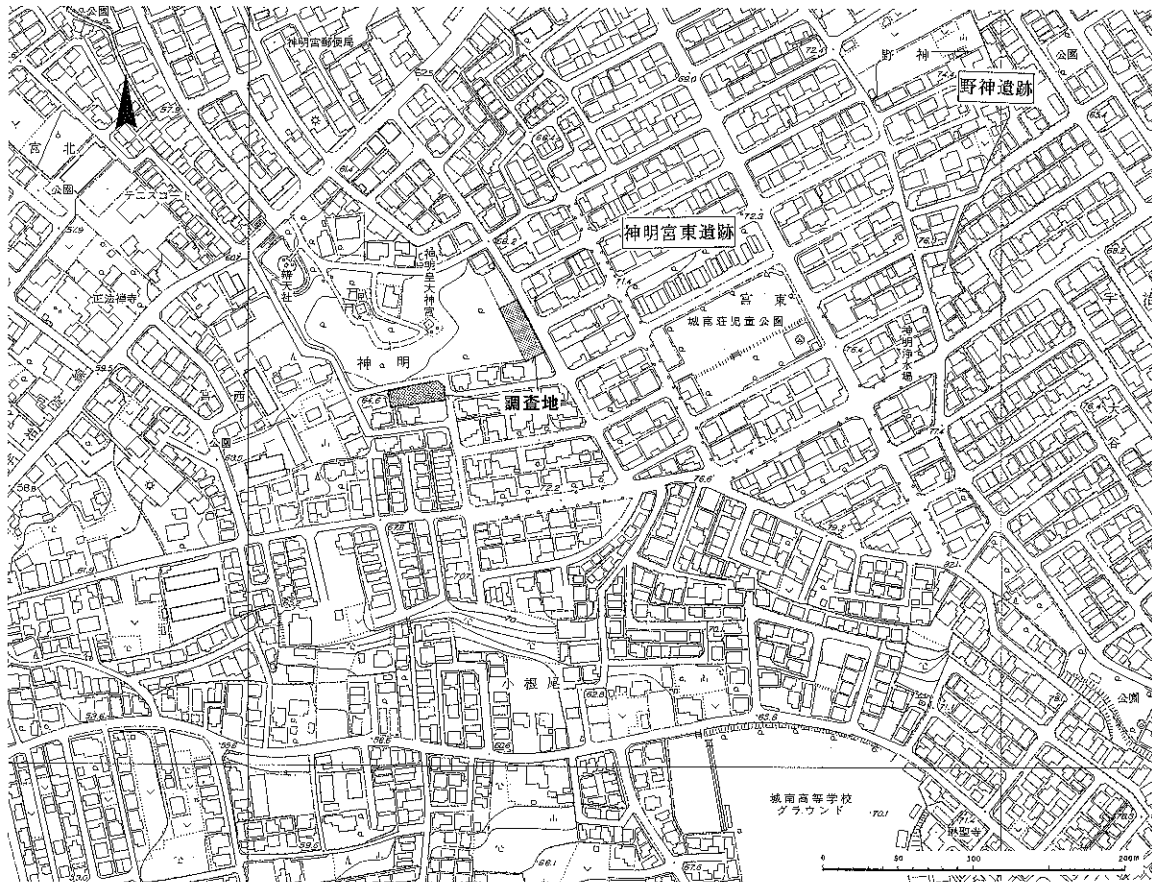
1. はじめに

本調査は、宇治市神明宮西35-1他において計画された、宅地造成に伴って実施した神明宮東遺跡の発掘調査である。

調査地は、東から西に向かって緩傾斜する宇治丘陵の西北部、標高70m付近に位置する。調査前の状況は荒蕪地であった。当遺跡は、中世遺物が表採されていることや遺跡内の神明神社の存在から、中世集落の存在が予想されていた。神明神社は、社伝によれば平安遷都に際し天照大神・豊受大神を勧請したとされる。記録上は、権大外記中原康富（?～1452）の日記『康富記』上に社名の記載があるため、室町時代には存在していたと見られる。

当遺跡周囲には、北東部に隣接して野神遺跡がある。石鏃が大量に採集されている他、中世墓が検出されている¹⁾。被葬者の出自としては、宇治市街遺跡（町屋）との関連性が想定されている。当遺跡についても、同集落に伴う墓地である可能性が考えられる。

調査は、平成7年3月17日から同年3月21日まで実施した。調査面積は計78㎡である。



第1図 調査地の位置

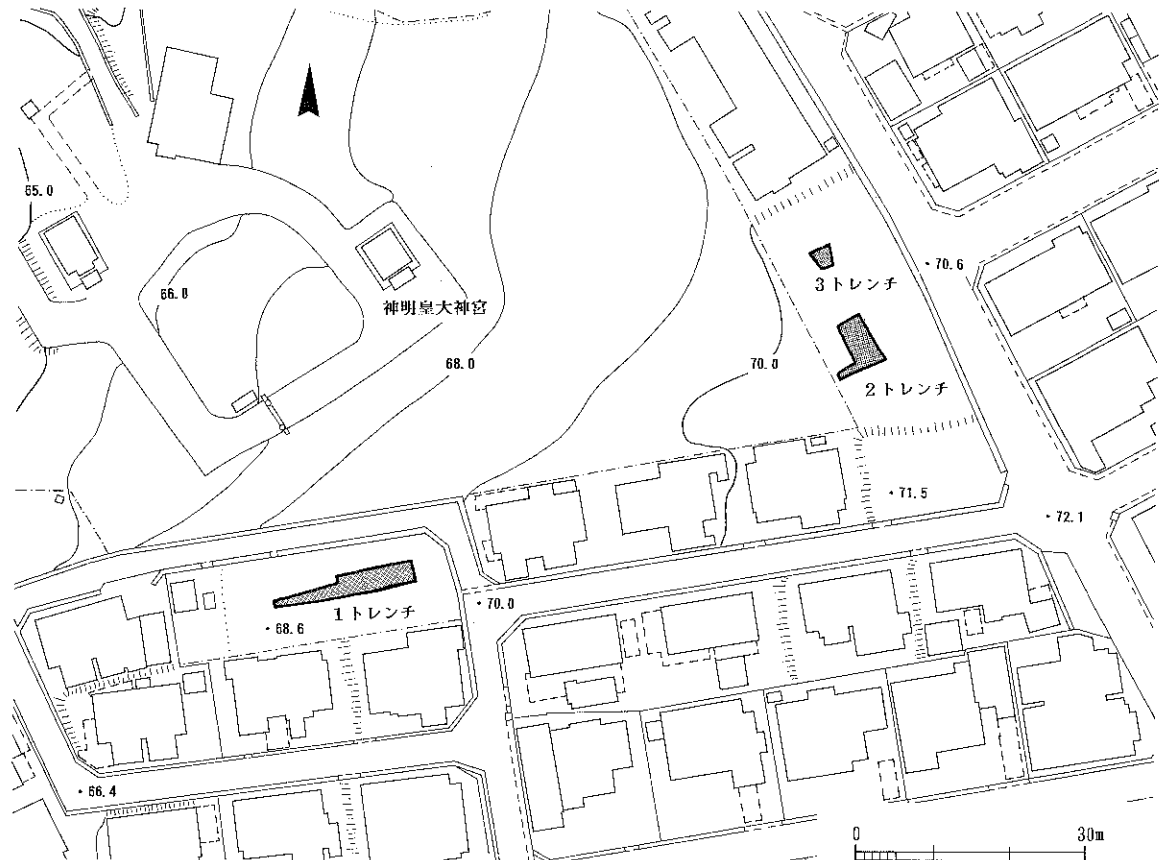
2. 調査の概要

調査地は、標高70mを測る段丘上に立地している。周辺は、南西に向けて緩やかに下る傾斜地にある。今回は、神明神社（現新明皇大神宮）の50m東南に位置する1トレンチ（東西20m×南北3m）と、大神宮から100m東の2トレンチ（東西6m×南北8m）、3トレンチ（東西4m×南北4m）の3カ所にトレンチを設定した。

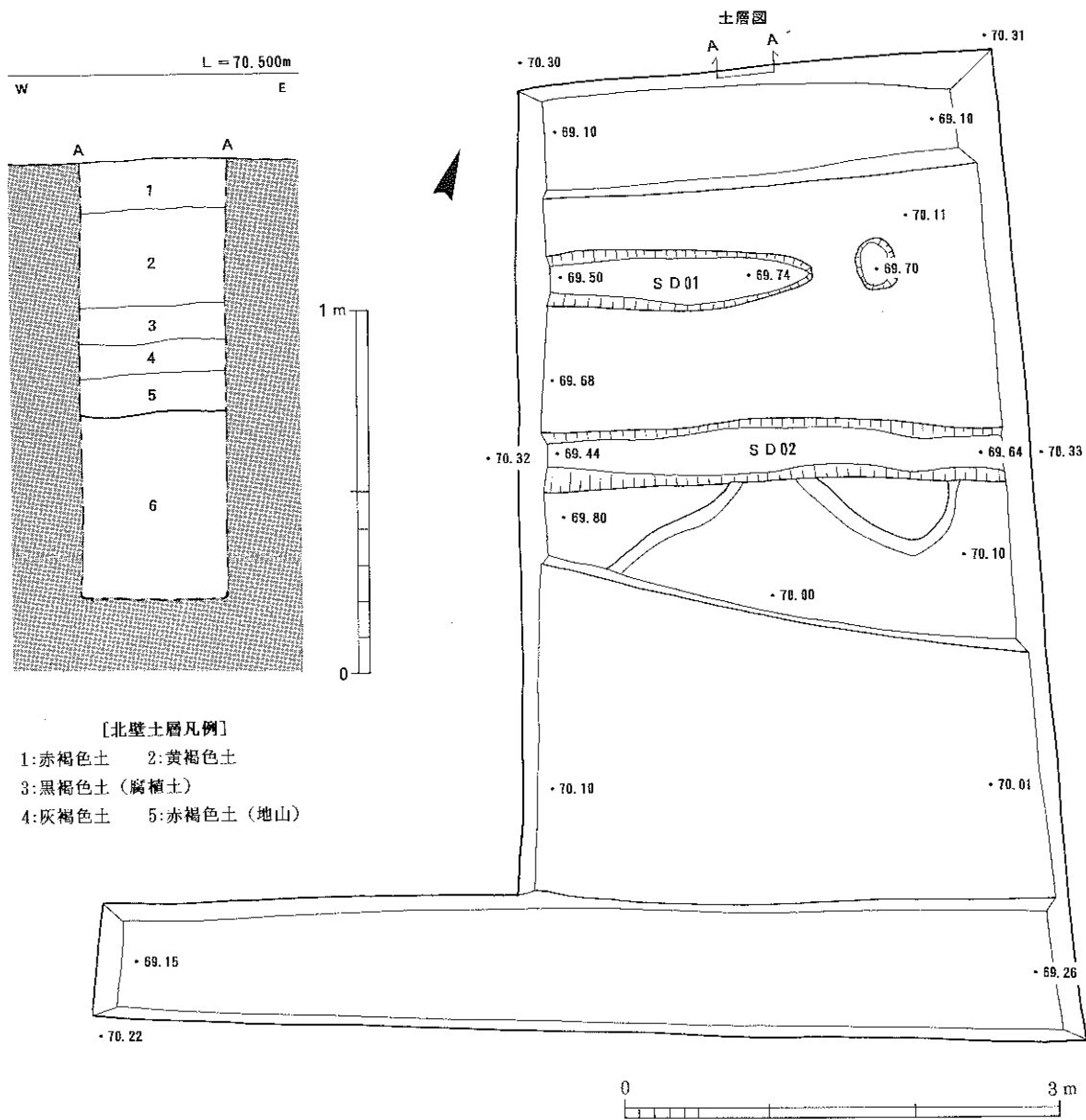
重機掘削は、1トレンチ、3トレンチ、2トレンチの順でいずれも遺構面直上の遺物包含層まで行った。その後は人力掘削で調査した。以下トレンチごとにその概要を述べる。

1トレンチ 1トレンチは西端の標高68.6m、東端で69.0mの北西にのびる緩斜面である。表土（茶褐色土・耕作土）下に赤褐色土の地山を検出した。表土厚は約20cmである。トレンチ西側は、約1mの深さでコンクリート片を大量に含む攪乱層があったため、西側での発掘は中止し、遺構の有無が判断可能な東側を重点的に調査することにした。しかし、ここでも耕作等による削平が著しく、遺構存在は確認できなかった。わずかではあるが、須恵器片1片・瓦器片1片が出上り、遺構が周囲に存在する可能性が考えられた。

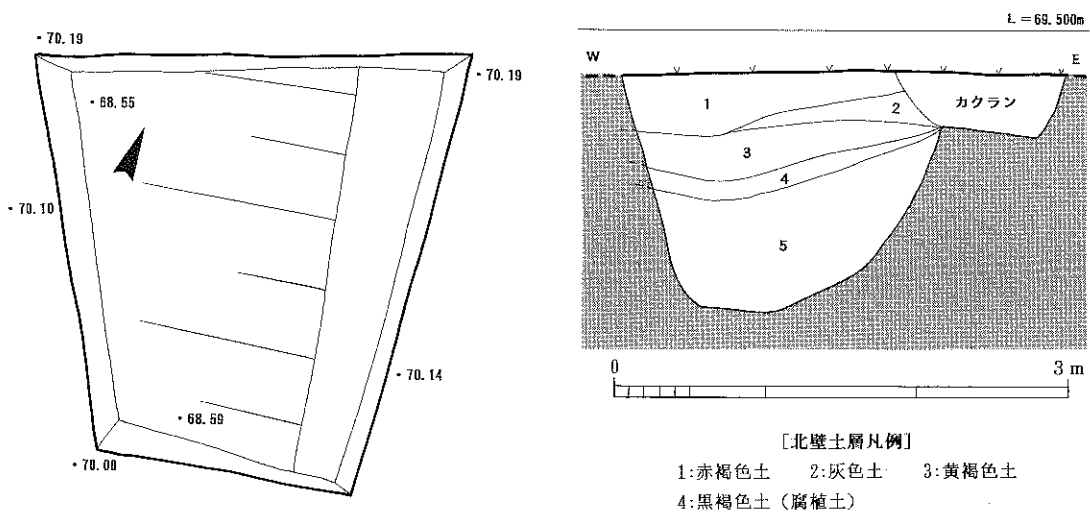
2トレンチ 2トレンチは北端の標高70.1m、南端で70.2mのほぼ平坦な土地である。層序は6層に分別できた。上層から順に、茶褐色土（整地層・現代）、赤褐色土、黄褐色



第2図 トレンチ配置図



第3図 2トレンチ平面図・土層図



第4図 3トレンチ平面図・土層図

土、黒褐色土（腐植土）、灰褐色土、赤褐色土（地山）である。調査は、削平のみられない北半分を中心に遺構の検出を行った。その結果、灰褐色土層をベース面として東西に細長く伸びる2本の溝（S D01・02）が検出された。溝S D01は、幅30cm、深さ10cmでトレンチの西端から中央付近でおさまるものである。溝S D02は、幅40cm、深さ15cmでトレンチを貫いて走っている。いずれも埋土からは遺物が出土せず、時期不明である。

3 トレンチ 3トレンチでは、地表面より約40cm下で東から西に向かって大きく落ち込む傾斜が確認され、かつて溜め池状のものが存在していた。埋土の状況は上層から順に黄褐色土、黒褐色土（腐植土）、黒褐色粘土（腐植土）、そして黄褐色粘土（地山）である。腐植土層は、池の堆積層で、人為的なものと考えられる黄褐色の土によって埋められたものと理解した。遺物は出土せず、時期は不明である。

3. まとめ

以上、今回の調査では溝2本の検出にとどまったため、遺跡の実態は依然不明といわざるをえない。しかしながら、遺跡展開が見られることは間違いなく、今後も周辺の調査に対して十分な配慮を行ってゆきたい。

注1. 荒川史「野神遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第32集 1995



第5図 2トレンチ全景（南東から）

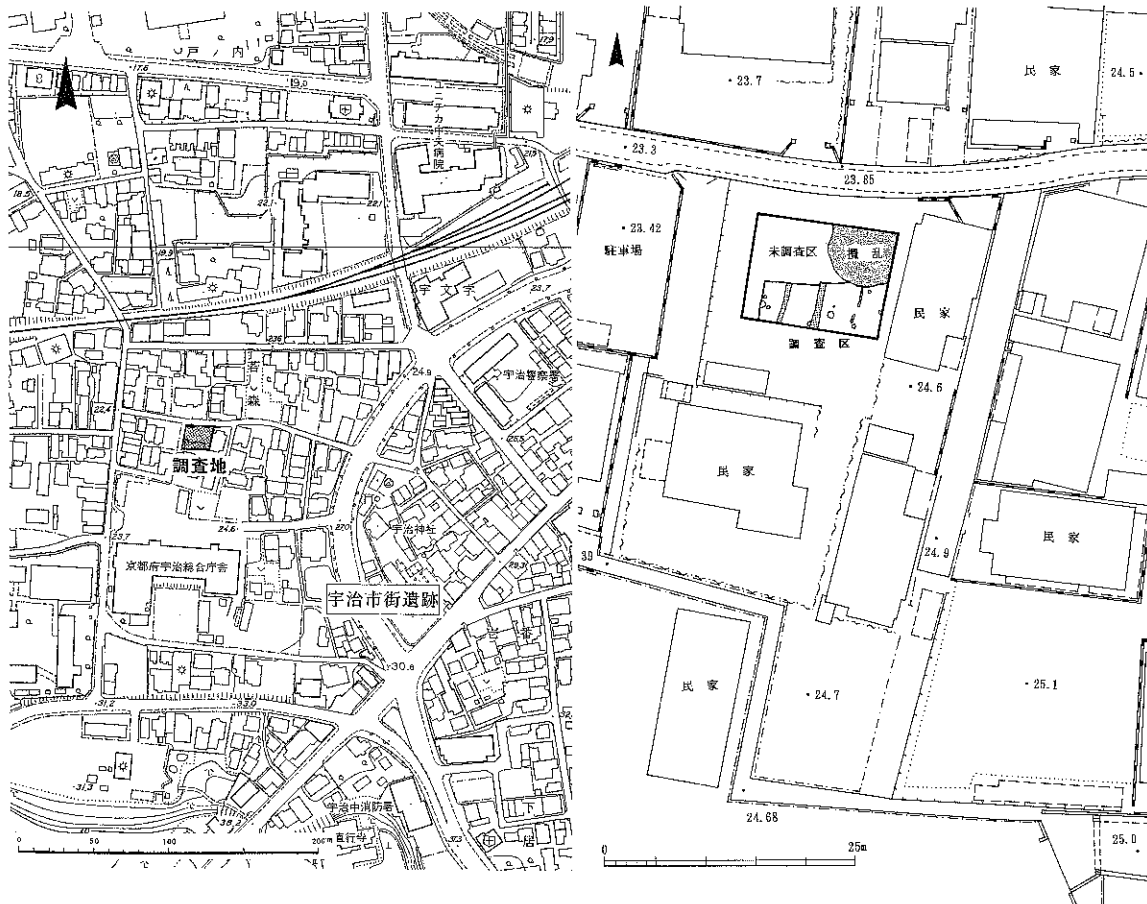
Ⅵ. 宇治市街遺跡（若森27-2）発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、宇治市宇治若森27-2で計画された住宅新築に伴う宇治市街遺跡の発掘調査概要である。

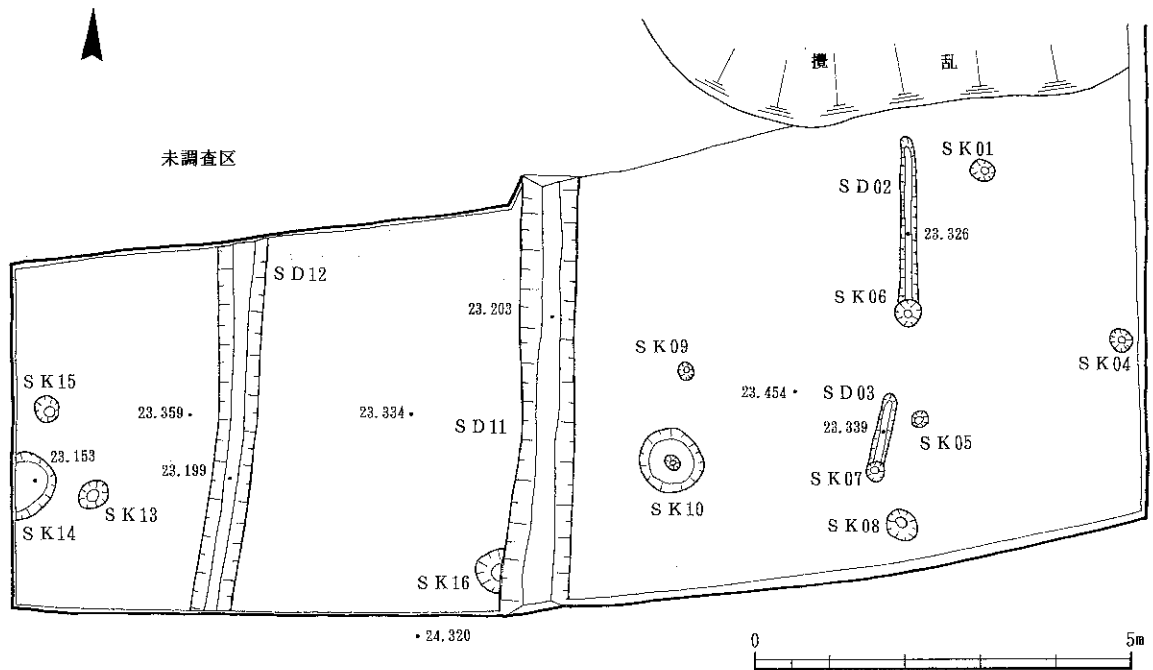
宇治市街遺跡は、宇治橋を中心に宇治川兩岸に展開する遺跡で、現宇治市中心域とほぼ重複する。古墳・奈良時代には集落域として安定的繁栄がみられるが、平安時代に入ると藤原摂関家の別業群造営が画期となって、さらに大きく発展した。その後、中近世では宇治の商業地区の中心として新たな展開をむかえ、現在に至っている。このように、宇治市街遺跡は様々な内容を含んだ遺跡群の総称であるといつてよい。過去の調査は発掘・試掘を含めると25回に近い回数を重ねているがいずれも小規模調査で、実態把握にはほど遠い現状であり、調査を重ねるごとに遺跡の範囲が拡大することが明らかになっている。

今回の調査は、平成12年2月3・4日で行った。調査面積は80㎡である。



第1図 調査地の位置

第2図 トレンチの位置



第3図 トレンチ平面図



第4図 トレンチ全景 (南東から)

2. 調査の概要

今回の調査地は、宇治橋から約100m南西地点に当たる。付近は、調査地点を境に北側には沖積地帯が、南側には宇治丘陵端に帯状に派生する低丘陵が広がる形となっている。現在、周囲には民家が密集している。

調査は、当初立会調査で対応することとしていたが、良好な状態で遺構を確認したため、事業者のご協力を得、急ぎよ発掘調査に変更した。

a. 検出遺構

調査地の層序は、約80cmの表土、約20cmの遺物包含層（暗茶褐色土）、遺構面が展開する地山（暗褐色土）であった。

検出遺構は、溝、土壇、柱穴であり、平安時代集落の展開が認められた。

また、遺物が整理箱に約2箱分出土している。主にSD11・12および包含層から出土しており、概ね、11世紀後半から12世紀前半の範疇に含めてよい。

SD02,03 両者とも幅約30cm・深さ約10cmの溝である。小規模であるが南端に柱穴が見られ、内部には礎石状の小礫が見られた。遺構の性格については、付近に柱穴が点在することと合わせみて、民家などの簡易な建物の存在を想定しておきたい。

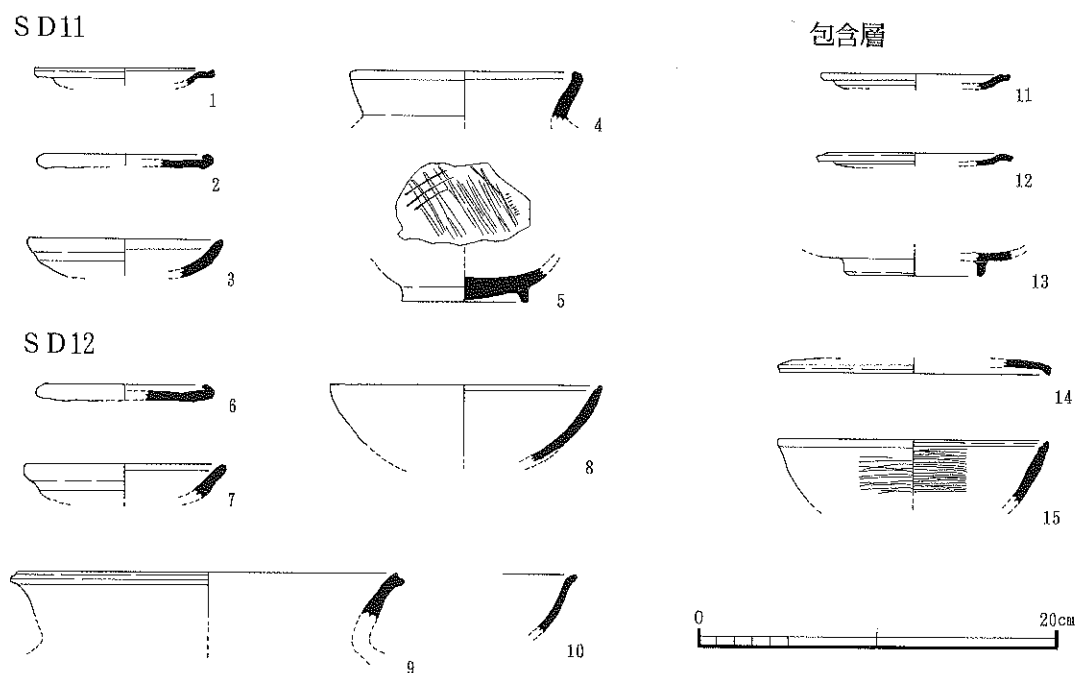
SD11 南北方向の溝でSD12とほぼ平行する。規模は幅80cm・深さ15cmで、底はやや北に向けて低い。出土遺物には、土師器皿(1~3)・甕(4)、瓦器片、白色土器碗(5)がある。1は市内出土の「て」の字状口縁の中ではやや器壁が厚いタイプのものである。3の2段ナゲはやや鋭さを欠く。いずれも胎土は褐色を呈する。5は見込みにへう磨きを持つ。

SD12 幅60cm・深さ15cmである。SD11とは規模の近似が見られる。両溝間は3.8mを測る。両者は道路側溝、もしくは築地となる可能性があるのではないかと考えている。出土遺物には土師器皿(6・7)、瓦器碗(8)、須恵器甕(9)、青磁碗(10)がある。

b. まとめ

小規模な調査であったが、平安時代後期、宇治の町屋が中宇治地区を越え西側にまで展開していた様相を知ることができた。SD11・12については、道路にしては規模が小さく検討の余地を残すが、中宇治地区には方位に沿った平安時代の地割が残る可能性があることが近年指摘されて¹⁾おり、今回の検出遺構がその地割影響下に成立したことを考え得る点は興味深い。今後、周辺での調査の蓄積を期待したい。

注1 浜中邦弘 『宇治市街遺跡発掘調査概報(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第44集)』 1998

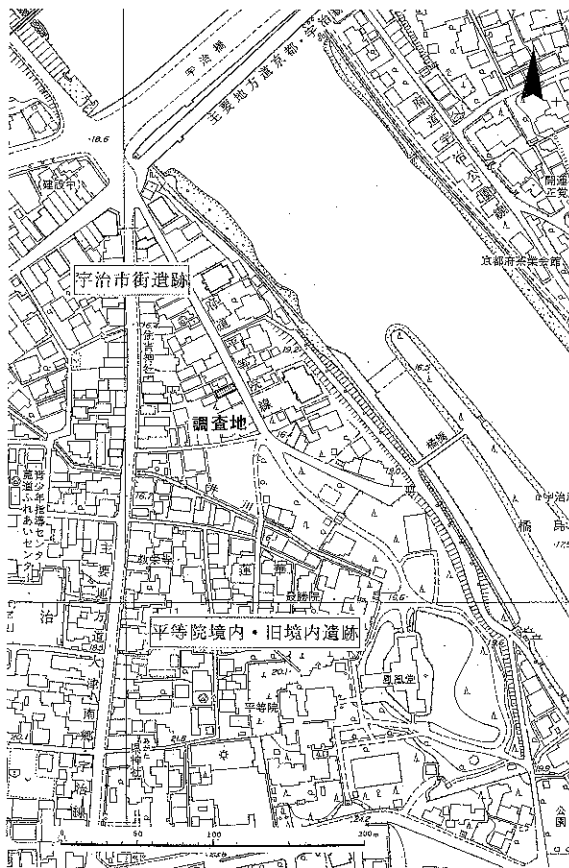


第5図 出土土器実測図

Ⅶ. 宇治市街遺跡（蓮華107-1）立会調査概要

本報告は、宇治市宇治蓮華107-1（上林三星園）で計画された店舗建替工事に伴う立会調査記録である。工事内容は、建物基礎梁埋設部分について約1m幅の埋設溝を掘削するものであった。そのため、重機掘削時に立会調査を実施することとなった。実施日は平成11年6月17日・18日である。

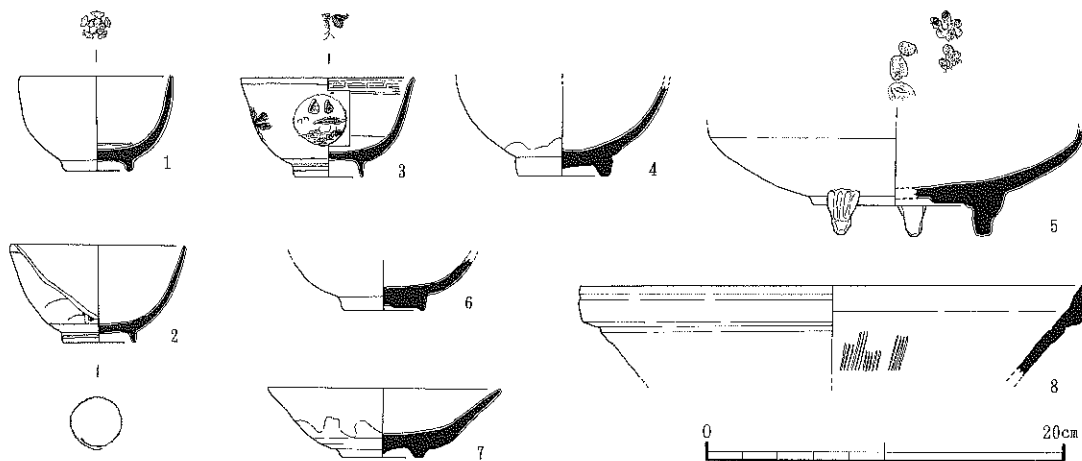
調査の概要 当日、掘削開始直後に近世町屋焼亡層及び遺物の出土を確認した。そのため、層序を確認しつつ遺物の採取を行い、終了後には土層観察および写真撮影で記録を作成した。今回の掘削面積は概ね30㎡で、深度は地表下平均1.7mである。この範囲で近世火災層を3層確認した。調査地北側面の層序は、1：近代表土（80cm）、2：近世・近代整地層（黄褐色土；20cm）3：近世火災層（黒褐色炭層；8cm）、4：近世整地層（暗黄褐色土；10cm）、5：近世火災層（黒褐色炭層；10cm）、6：近世整地層（褐色土・炭・青灰色砂質土；15cm）、7：近世前期火災層（15cm）、8：近世前期盛土層（青灰色砂質シルト）である。遺構については、近・現代の石垣の一部を確認したにとどまった。なお、近世前期を溯



第1図 調査の位置



第2図 土層の状況



第3図 出土土器実測図
(1～3：第1層, 4～6：第3～6層, 7・8：第7・8層)

る遺構・遺物は、両者ともに確認できなかったため、さらに下層に埋没しているものとみられる。

出土遺物 整理箱1箱分が出土している。いずれも近世のものである。第3図1～3は、近現代表土(1)からの出土遺物である。いずれも近世後～末期の肥前陶器碗である。4～6は、近世火災層及び整地層¹⁾(3～6)から出土した遺物である。4は国産磁器碗で、内面に透明の、外面に緑青色の釉がかかる。5・6は肥前陶器皿・碗である。近世後～末期。7・8は、近世前期火災層・近世前期盛土層(7・8)から出土した遺物である。7は、国産陶器皿で、内外面淡白色の釉がかかる。重ね焼きの痕跡が残る。8はすり鉢で信楽産とみられる。他にも同層からは、黒釉のかかった天目茶碗片や国産陶器片が出土している。

まとめ 以上に述べたように、層序中にみられる3層の火災層は上層の2層が近世前～後期、最下層が近世前期のものともみられることが確認できた。

当時、調査地を含む宇治橋から平等院北門前には主に商家で構成される町屋が形成されていたが、周辺は度々大小の火災に悩まされたことが諸記録より確認できる。調査地から東へ60mの地点では、調査で2期の火災層を確認しており、いずれも元禄年間の火災記事に相当する可能性が指摘されている。今回、どの層がいつの火災に相当するものかは特定できなかったが、いずれかが、元禄十一年の火災に比定できる可能性が高い。

また、火災層中には、材木など固形の消失残存物が確認できなかった。このことから、片付け行為があったにせよ、瓦が出土しなかったことも合わせて、比較的軽量の構造で家屋が建築されていたらしいことが窺える。

このように、調査地近辺は比較的良好な状況で近世遺構が遺存していることが確認できる。今後、町屋全体像の復元も含め、詳細が明らかになることを望みたい。

注1) 杉本宏「平等院旧境内遺跡北限部発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第19集 1992

抄 録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはつかつちようさがいほう							
書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第48集							
編集者名	吹田直子・浜中邦弘・中村幸代・小谷紗代							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
春日森遺跡	宇治市小倉町 久保119-2	26204	77	34° 53′ 45″	135° 47′ 07″	990126 ∩ 990401	200㎡	病棟増築
広野遺跡	宇治市広野町 東裏 107-1, 107-5	26204		34° 52′ 13″	135° 47′ 00″	991217 ∩ 000327	150㎡	道路建設
尊勝寺跡	宇治市木幡東 中25-1他	26204	141	34° 55′ 43″	135° 48′ 18″	990914 ∩ 990921	72㎡	宅地開発
赤塚遺跡	宇治市畑山田 20-3	26204	48	34° 55′ 53″	135° 48′ 23″	990721 ∩ 990730	57㎡	宅地開発
神明宮東遺跡	宇治市神明宮 東35-1他	26204	13	34° 52′ 54″	135° 47′ 36″	970317 ∩ 970321	78㎡	宅地開発
宇治市街遺跡 (若森27-2)	宇治市宇治 若森27-2	26204	74	34° 53′ 06″	135° 48′ 04″	000203 ∩ 000204	80㎡	住宅建設
宇治市街遺跡 (蓮華107-1)	宇治市宇治 蓮華107-1	26204	74	34° 53′ 15″	135° 48′ 33″	990617	30㎡	店舗建設

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
春日森遺跡	集落	平安鎌倉	溝・土壇・柱穴	土師器・須恵器 ・瓦器・陶器	
広野遺跡	集落	古墳鎌倉	溝・土壇・柱穴	土師器・須恵器 ・瓦	
尊勝寺跡	寺院集落	鎌倉室町	土壇・柱穴	土師器・須恵器	
赤塚遺跡	集落	鎌倉	沼(湿地)	土師器・須恵器 ・磁器・陶器	
神明宮東遺跡	集落	鎌倉室町	溝	土師器	
宇治市街遺跡 (若森27-2)	集落	平安	溝(道路遺構か) 土壇・柱穴	土師器・須恵器 ・白色土器 ・瓦器・陶磁器	
宇治市街遺跡 (蓮華107-1)	集落	江戸	被火災住居	土師器・磁器 ・陶器	

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
第48集

発行日 平成12年3月31日
 発行者 宇治市教育委員会
 〒611-8501 宇治市宇治琵琶33
 (0774) 22-3141(代)
 印刷 (有)南山城複写センター

